黒毛和牛召喚記：番外編

卯堂 成隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒毛和牛召喚記：番外編

【Ｎコード】
Ｎ４９４８Ｐ

【作者名】
卯堂　成隆

【あらすじ】
拙作、【黒毛和牛召喚記】の番外編です。
本編の間に時事ネタなどの番外編を挟むのがあまり好きではないので、こちらに独立させました。
本編を読んでないとわからない部分が多々あると思いますので、もし初見の方がいらっしゃったら、ぜひ本編のほうにも遊びに来てください。

【黒毛和牛召喚記：本編】ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅ

tu.com/n4403o/

季節外れのおつかいと【黒毛和牛】奇妙なカボチャ

「ねぇ、ミノ君の故郷にはカボチャを飾るお祭りがあるんだって？」
突然そんなことを言い出したシアナを、ミノルは珍獣を見る目で覗き込んだ。

「どっから聞いてきた、そんな話？」
神殿に属しているとはいえ、仮にも陰陽道という宗教に属している身である。
他所の宗派の祭りなど触れる機会はほとんど無い。
……いったい誰に吹き込まれたのやら。

「んーと、さっきオヤツをくれた神人（じにん）Aさんから」
「あいつめ……よけいな事を」
女に弱いことには定評のある神人（じにん）（神社の下級神官）共である。
どうせ、シアナの興味を引きたくて余計な事までベラベラしゃべったに違いない。
……もしシアナがクリスマスのプレゼントを強請ってきたら、あいつら全員屋根からつるして干物にしてやる。
その場にいない神人（じにん）に怒りを燃やすミノルの横で、シアナは異教の祭りに興味津々の様子。

「で、なんてお祭りだっけ？　ハロゲン？」
電気屋や日曜雑貨店の売り出しにありそうな、なにやら暖かそうなお祭りだ。
「ハロウィンだ！！　……どこの家電製品だよ！　ついでに今は春先だ！　ハロウィンは１０月の終わり！！」
あいかわらず話していると疲れる女だ。
黙っていれば目の保養なのに。

「そんな細かいこと気にしなくてもいいじゃない」
ため息をつくミノルの気持ちをしらず、シアナは能天気に笑う。
「でさ、こんな挨拶するんだって？　Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！（お菓子をくれなきゃ悪戯しちゃうぞー）」

来たか。
予想通りの話の展開に、ミノルはしかめっ面で用意した答えを口にする。

「悪いがお菓子なんて持ってないぞ。　他をあたれ」
「ぶーぶー　別に、お菓子じゃなくていいから、カボチャのお化けがほしいな」
食い意地の張ったシアナには珍しく、食べ物ではなくて、ハロウィン縁（ゆかり）の妖精に興味を抱いたらしい。

「なに、ジャック・オー・ランタンか？　たしかその妖精と契約している奉仕者（アルバイター）もいたはずだな。　よし、交渉してくるか」
意表を突かれた事で興味を覚えたのか、ミノルも珍しく乗り気な態度で話を進めようとする。

「ちがうー　本物がほしいんじゃなくて、カボチャをくりぬいた飾りがほしいの！！」
だが、シアナの希望はさらにその斜め上をいっていた。

「……なんでそんな物ほしいんだ？」
「え？　かわいいじゃない。　さっきＡさんが地面に落書きしていたのを見てほしくなったのー」
握りこぶしを口元であわせ、小首を傾げておねだりのポーズ。

だが、ミノルは眉を寄せて一刀両断。
「理解できん」
なぜあんな不気味なものをほしがるのだろう？
シアナの嗜好のおかしさ、はミノルにとって永遠の謎だ。
「理解しなくていいから、くれるの？　くれないの？　くれないんだったら、耳に息吹きかけちゃうんだから！」
悪戯より恐ろしい脅し文句に、ミノルは全身の毛を逆立てながら首を縦に振る。
「わかったわかった！　わかったら耳にさわるのはやめろ！！」
かくして、憮然（ぶぜん）とした黒牛は、神社の鳥居をぐぐって街へと買い物に出かけるのであった。
＞i12970—1402＜
「なに？　カボチャは売ってない！？」
八百屋にたたずむ、籠をくわえた黒い巨体。
むろんミノルである。
「そりゃー無理ってもんだぜ、にーちゃん。　カボチャは夏の終わりにできる野菜だろ？」
春先にカボチャを求めるのは、まさに木の上に魚を求めるようなものである。
「魔法でも使わなきゃ無理ってもんだよ」
八百屋のオヤジは肩をすくめた。
……魔法か。

おっ、その手があったか。
ミノルの頭に、何かひらめくものがあったらしい。
「オヤジ、いいことを言ってくれた。　今度、腰痛の薬を届けてやろう」
「は？　おぉおぉ、そりゃ助かる。　何が役に立ったかしらんが、にーちゃんの役に立てたなら俺も嬉しいよ」
お互い笑顔で別れの挨拶をすると、ミノルは魔法のカボチャを求めて上機嫌で走り出した。

……農林試験場へ。

＞ｉ１２９７０―１４０２＜

古来より、旱魃や冷害に強い農産物の改良は国家の死活問題であった。
そのためミノルは、この街の守護神に就任するなり、この町に農林試験場を設立したのである。

日本の農業技術を魔術的にアレンジし、新しい品種の作物を生み出す研究は、すでにハウス栽培のノウハウを一般農家に公開する手前まで進んでいた。
野菜の旬を狂わせることに抵抗が無いわけではないが、飢饉対策の必要性や農業における収入への期待はそれを補って余りあるほど大きかったのだ。

「運がいいですな、ミノル様。　幸い、一個だけカボチャが実っております」
ニコニコと笑顔でミノルを出迎えた研究者は、すがるような目をしたミノルに小ぶりのカボチャを差し出した。
「まぁ、さすがにまだ味の方は保障できませんが……」

さすがにこの時期にとれるカボチャは、品種改良が未完成のために味がほとんど無いのだ。

「いや、食べるためじゃないんだ！　助かる！！」

ミノルの顔色を伺う研究員から小さなカボチャを受け取ると、ミノルはそれを買い物籠の中に入れるように指示した。

……牛の姿は手が使えないのでこういう時はひどく不便だ。

「いえいえ。　お役に立てれば何よりです。　で、この研究をさらに続けるためにも資金の方が……」

「そ、その話はまたこんどな！　今日は急いでいるから！！」

雲行きが怪しいことを察したミノルは、驚異的な勢いで話を打ち切ると、逃げるように神社へと駆け出した。

「ふぅ、危機一髪だ。　まぁ、今回の手柄もあるし、研究資金の方も考えておかないとな。　馬鹿領主のヒゲでも引っこ抜きながら資金を脅し取ればいいか」

物騒なことを考えながら、川沿いの大通りに出た時である。

「ん……？」

ミノルの目の前で、一匹の子猫が馬車の前に飛び出した。

「あぶねぇっ！！」

口にくわえた籠を放り出し、神速で駆け寄り、その口に子猫の首をくわえる。

さらに、恐怖に震える馬の首に後ろ足を優しく添えて、回し蹴りをするような動きで進路を反らした。

そして荷台が突っ込んでくる前にすばやく飛びずさる。

だが、この行為が悲劇の始まりだった。

ミノルが放り投げた籠を拾いに戻ってきたときに見たものは……
地面に落ちて粉々に砕け散ったカボチャの残骸だった。
収穫したばかりのカボチャは、ひどく柔らかいのだ。

おまけに、飛び散った破片をカラスが美味しくいただいている。
おかげで、破片を集めて魔術で再生させることもできない。
「……あぅ」
肩を落とすミノル。

こうなっては、どうすることもできない。
さて、どうしたものか……

＞i12970—1402＜

「おんや？　シアナちゃん何それ」
首をかしげる神人（じにん）Aの目の前には、緑の野菜を目や口のような形にくりぬいた、てのひらほどの大きさの奇妙なオブジェが鎮座していた。

「これ？　ミノ君作のジャック・オー・ピーマン」
「なんだそりゃ！？」
珍妙な顔をする神人（じにん）A。
「ミノ君はジャック・オー・ランタンだって言って渡してきたけど、まぁ、気付かないふりしてあげたわ」
笑いながら、その不気味なナマモノを保存するため、カーテンレールに吊り下げる。

「うーわー、相変わらずの猫被り」
苦笑する神人Aに、どや顔を向けて胸をはり、シアナは片目をつむって微笑んで見せた。

「いいの。　ほんとに欲しかったのはそんな飾りじゃないから」

本当に欲しかったのは、彼が苦労して手に入れてきた、心のこもった贈り物。

それが本物だろうとまがい物だろうと、シアナには関係ない。

それに……最近あまり構ってくれない彼を、ほんのちょっと困らせてみたかっただけなのだ。

目的は十分に達成できた。

このピーマンでできた飾りを渡してきた時の彼の顔ときたら……思い出すだけで、シアナは吹き出しそうになる。

さて、本当のハロウィンの時期になったら、このピーマンを見せてもう一度ジャック・オー・ランタンを強請(ねだ)ろう。

悪戯(トリック)されたい？　それとも、愛(オア)されたい？　愛(トリート)されたい？

もし愛されたいなら、あなたの甘い心(スイーツ)をくださいな。

そのとき彼はどんな顔をするだろうか？

季節外れのおつかいと【黒毛和牛】奇妙なカボチャ（後書き）

当日になるまでハロウィンを忘れていたとか、晩飯にピーマンが出たので急にネタが出たから2時間の突貫工事で書いたとか言うことは……すいません。　全部本当ですｏｒｚ

番外編：お気に入り１００人突破記念特別企画【黒毛和牛】悪魔の黒いグラタン

おかげさまで、拙作をお気に入りに登録してくださった方が間もなく１００人になります。
卯堂の性格だと、１００人になってからでは確実に後回しにし、その後忘れてしまったあげくになかったことにしてしまいかねませんｗ

番外編：お気に入り１００人突破記念特別企画【黒毛和牛】悪魔の黒いグラタン

こんにちは、シアナです。
今日は、お気に入り１００人突破の記念をいたしまして、特別料理を作ってみましたー

しかも、なんとリテイク無しの一発勝負！！
レシピもオリジナルな上に、リハーサル無しという勇者っぷり。
ねぇ、作者。　作るのはいいけど、毒になったら自分で全部食べなさいよ？

さて、前置きはこの辺にして、
お気に入り１００人突破記念、荒ぶるキッチン【黒毛和牛：料理編】をおとどけしまーす。

＞i１２９７０―１４０２＜

メニューはこちら！！

『烏賊墨（いかすみ）タラモグラタン黒毛和牛仕立て』※野郎一人前

A：フィリング
【ジャガイモ】……２００～３００ｇ
【市販のイカスミパスタソース】……一人分
【牛乳】……適量

B：デコレーション
【スライスチーズ】……一枚（できるだけ薄いものを選ぶ）
【パン粉】……適量
【オレガノ】……適量（風味付け）

【パセリ】……適量（飾り）
>i13796—1402<
さて、レシピの内容ですが……ミノ君がお肉を食べられないのと、見ばえを重視しているので具をいれてません。
ま、卯堂が具沢山を好まないのもありますが、その辺は全部スルーで。

もし、自分で作ってみようという方がいらっしゃったら、フィリングの下に具を色々といれるといいです。
フィリングに混ぜ物があると、デザインが綺麗に出ないのでご注意。

作者の卯堂は、サーモンとタマネギの炒め物なんかいいんじゃない？　と、適当なことを言っております。
もちろん、ミートソースにしてシェパードパイにしてもおいしい……と思いますよw

>i12970—1402<
1. ジャガイモを煮込む
>i13795—1402<
ジャガイモは皮をむいて、さいの目に切り、鍋で茹でます。
箸がさくっと通るぐらになったらOK
あまり茹ですぎると煮崩れ起こしますよー
>i12970—1402<
2. デコレーションのデザインを決めるw

>i13797|1402<

はい、あまり細かいものをデザインすると後が大変です。
一応、どんなデザインにするか紙に書いたほうが失敗は少ないと思います。

今回のデザインは、いつもの目つきの悪いウシさんのイラストですが、たとえば某電気ネズミだとか某ゲーム会社の音速ネズミだとか、千葉の版権ヤクザのネズミとかをモチーフにすると、お子さんはよろこぶと思いますよー

え？　はい、特にネズミに恨みもこだわりはありませんので、気にしないでください。

>i12970|1402<

3．チーズを切る。

>i13798|1402<

包丁だと細かいものを作りにくいので、綺麗に洗ったカッターで切りましょう。
デザインが細かい場合は、イラストを鋏で切って型紙を作ると便利です。
型紙を使う時は、インク等がチーズにつかないように注意してくださいね。
そして、切ったチーズはビニールの上に左右反転の状態で並べましょう。

>i12970|1402<

４．フィリングを作る
>ｉ１３７９９―１４０２<

茹でたポテトをマッシャーで素早く潰し、市販のイカスミパスタのソースを入れて混ぜ合わせます。
お好みで牛乳を混ぜて硬さと食感を調整してください。

牛乳が多いと食感が滑らかになりますが、入れすぎると、あとでチーズを飾り付けるときが大変です。
生のイカスミが手に入るなら、ケチャップ大匙２、すり下ろしたニンニク１欠、塩つまみ、胡椒適量をオリーブオイルで炒め、そこにイカスミを加えてソースを作りましょう。

むろん、行き当たりばったりな卯堂はイカスミを仕入れる時間がなくて、スーパーでイカスミパスタのソースを買ってきたようです。
ヘタレですねー

>ｉ１２９７０―１４０２<

５．フィリングを敷き詰める
>ｉ１３８００―１４０２<

グラタン皿にフィリングを敷き詰めるとこんな感じになります。
具を入れるときは、このフィリングの下にいれておくと綺麗です。

>ｉ１２９７０―１４０２<

６．チーズを飾る
>ｉ１３８０１―１４０２<

フィリングの上に、ビニールの上に敷き詰めたスライスチーズを素早く貼り付けて、ゆっくりと剥がします。
チーズの厚みが分厚いと、この時にはがれてしまうかもしれないのでご注意ください。
急いでビニールを剥がすと、チーズが切れてしまったりしますよ？
慌てず急がずが肝心です。
無事にチーズを貼り付けたら、パン粉を絵が隠れないように敷き詰めます。

マッシュポテトに卵黄を混ぜたものをうにうにと絞って、ケーキのようなデコレーションにしてから焼いても綺麗ですよね。

＞ｉ１２９７０―１４０２＜

7．焼く

＞ｉ１３８０２―１４０２＜

オーブンにいれ、２５０度で２０～２５分ほど余熱無しで焼きます。
すでに火が通っているものなので、生焼けの心配はありません。
ちょうど良い焼き加減になればＯＫです。

＞ｉ１２９７０―１４０２＜

8．出来上がり

＞ｉ１３８０３―１４０２＜

風味付けのオレガノを散らし、パセリを飾りつけすれば完成です。

え？　味見？
やだなーそんな無粋な事しませんよ。
口に入れるまで、天国か地獄かわからないドキドキ感がステキなんじゃないですか。
では、私はミノ君にこれ持って行くので失礼しますねー
>i12970|1402<
>i13807|1402<
ごちそうさまでした♪

狂乱のクリスマス【黒毛和牛】シアナ、その愛と妄執の果てに（前書き）

クリスマスも近くなってきたので、忘れないうちに投稿……
ちなみにクリスマスって、ケーキを食べる日だよね？
恋人？　何それ、新しいケーキの名前？

狂乱のクリスマス【黒毛和牛】シアナ、その愛と妄執の果てに

「……不気味だ。　不気味すぎる。　なぜ奴は動かないんだ！？」
１２月も終わりに近づいたある日、ミノルは中庭に敷いた緑の毛氈の上でお茶をすすり、シアナの部屋をじっと眺めていた。
その傍らには、ボコボコにされた神人（じにん）ＡＢＣが折りたたむようにして倒れている。

なぜ彼ら神人（じにん）達がこんな目にあっているかというと……何のことは無い。
１２月２５日にクリスマスと言うイベントがあることを、シアナにしゃべったことがバレたのだ。

あのどうしようもなく甘えたがりなシアナの事だ。
どんなプレゼントを強請（ねだ）ってくるかわかったものじゃない。

もっとも、何をプレゼントするかと言うのは、シアナにとってあまり意味が無い。
高価な宝石や香水といったものを渡したところで、彼女はつまらなそうな顔をするだろう。
なにせ、彼女にとっての物の価値は、『相手が彼女のためにどれだけ無茶なことをしたか？』で決まるのだから。

逆に言えば、どんなに無様でも、心を込めた贈り物ならば彼女は喜ぶのだが……頑固で見栄っ張りなミノルが、シアナのために必死になる姿を見せたがるはずが無い。
ゆえに、毎回とんでもない要求をして困らせるのが習慣になっているのだ。
普通の女性のように服や宝石やアクセサリーで済むのなら、ミノ

ルにとっては万々歳といったところだろう。

過去を思い出せば……春先にハロウィンの飾りが欲しいなどと言い出した事もあり、その時はピーマンのジャック・オー・ランタンを渡す羽目になった。

そのピーマンは、水分とシリコン樹脂を入れ替えられ、剥製として大切に保存されている。

そんな経緯(いきさつ)もあり、今度は何を強請(ねだ)られるかと気が気では無い。

てな感じの理由で、現在は愛飲の玄米茶を片手にシアナの出方を窺っているのだが、当人は部屋に閉じこもったまま一向に出てこようとしない。

なにやら、古いインドの経典と絵の具を持ち込んでそれっきりである。

「くそっ、いっそ殺すなら一思いにトドメをさしやがれ」

そんな呟きを口にしながら、ミノルは退屈そうに指で地面をトントンと叩く。

さすがにここまで動きが無いと暇だ。

そもそも、ミノルは短気な性格であるのだから、待つと言う行為は非常に苦手である。

何かこの退屈を解消する手段は無いかとしばし悩み……ふと思い出したかのように懐から何かを取り出した。

そして、その殺人的に怖い顔を珍しくニヘラーと緩ませて、残像すら見えないスピードでモゾモゾと手を動かしはじめる。

「お、何してんだ黒毛和牛？　ニヤニヤして気持ち悪いぞ。　ん？　ん？　んんん！？」

復活した神人(じにん)Aが見たものは、色とりどりの鮮やかな毛糸を編み

こむミノルの姿。
「まさかおまえ！？　手編みのマフ……」
「も、もっかい死んで来い！！」
皆まで言わせず、即座に顔を真っ赤に染めて神人（じにん）Ａを庭の池まで蹴り飛ばすと、ミノルは作業を再開……せずに、その作りかけの作品を懐に戻して立ち上がった。

「最初からこうすればよかったのだ。　そもそも待つなど性に合わん！」
照れ隠しのようにそう呟くと、ずかずかとシアナの部屋へと足を進め、その部屋に続く襖に手をかける。

「シアナ、入るぞ？」
「だ、ダメっ！　ミノ君っ！！」
向こうから聞こえる焦った声。

着替え中ならそれもまたよし！
スケベ？　変態？　……よく聞け、これが健全な男子というものだ！！
だいたい、俺の着替え中にシアナが乱入するのはよくて、その逆がダメと言うのは理不尽だろ！！

理論武装を完了すると、シアナの拒絶の声をあえて無視し、ミノルは襖を大きく開いた。
「なにっ！？」
ミノルの目が驚愕に見開かれる。

そこにあったのは、サンタ風の衣装に身を包んだシアナの姿だった。

なぜかその手はサトウキビの茎に弦を張るという奇妙な作業の真っ最中。

しかも……

「おまえ、なんて格好してるんだ！？」

華奢な肩はむき出しでありながら、素肌を出し惜しみするかのように二の腕まで覆う赤の手袋。

足には同じく膝上までの赤のニーソックスを装備。

フワフワのフェルト生地でできたスカートとの間にのぞく白い太股、その白い悪魔をモジモジとさせる仕草は、まさに破壊力満点。

……か、かわええ。

不覚にも顔をピンクにそめて見惚れたミノルが、ポツリと呟き、慌てて頭をブルブルと振る。

でも、ちょっと嬉しい。

「……見たわね」

だが、秘密を知られたシアナは急に冷めた声で呟くと、

「見られたからには仕方が無いわ。　プランＡの奇襲作戦は削除。プランＢの強襲作戦にうつりますっ！」

不穏な台詞を叫ぶなり、左手にサトウキビの枝を持ち、右手で赤い染料の入った洗面器を手に取る。

「お、おいっ、お前何を！？」

そして、こともあろうか躊躇なく中身を頭の上にぶちまけた。

たちまち、シアナの全身が鮮血を浴びたように真っ赤に染まる。

もはやそこに先ほどまでの萌え系サンタ少女の面影は微塵も無く、あえて言うなら、そう。

鬼女、爆・誕★

「あはっ、あはははははは！！」
真っ赤な液体を滴らせながら、天を仰いで狂ったような笑い声を上げるシアナ。

「う、嘘だーっ！？」
いろんな意味でショックをうけたミノルが、この世の終わりのような悲鳴を上げた。

硬直するミノルを正面から見据えると、シアナは傍らの花瓶から花束をもぎ取り、
「くらえ、ミノ君っ！！」
左手に持ったサトウキビの弓につがえ、恐るべき速さで矢ように撃ち出した！

「どわあっ！？」
入り口の襖を蹴破り、転がるようにしてそれを避けるミノル。

トスっ。

そしてその矢は、偶然そこを通りかかった巫女の胸に吸い込まれる。
次の瞬間……

「し……シアナ様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！？　わたくし、わたくしずっと前からあなたの事が！！　この溢れる欲望（リビドー）を受け止めてくださいましぃぃぃぃぃっ！！」
目を血走らせて、ものすごい勢いで、血まみれの暗黒女神（カーリー）のごときシアナの胸に飛びこんでゆく。

「ええい、ウザいわぁっ！　ふんはぁっ！！」
そのサカリのついた巫女を、まるで歴戦の戦士のような気合の入った声と共にローリングソバットで一蹴すると、シアナは忌々しげに舌打ちをしてミノルにふたたび向き直る。

や、ヤバイ！？
これは何かものすごくヤバイ事が起きている！！

「……逃がさないわよ？」
たまにシアナは嫉妬に狂って、魔王もはだしで逃げ出すヤンデレモードに突入する事があるが、これはたぶん同じぐらいやばい。
その推論を裏付けるように、ニヤリと笑うシアナの目は、獲物を狩るハンターのそれだ。

「ち、ちょっと待て！　なんでそうなるっ！？　先に説明ぐらいしろっ！！」
普段なら、この手の輩は蹴って殴ってハイおしまいなのだが……
まさかシアナを殴り飛ばすわけにもいかず、無駄とは知りながらもミノルは必死で話し合いを求める。

「白々しいっ！　神人（じにん）Aから聞いたんだから！」
そんなミノルに、シアナはビシっと指を突きつけ、
「古代インドのベンガル地方に起源を持つカーリー・マー・スートラの経典が転化した風習……クーリス・マー・スーとは、狂乱の女神カーリーと愛の神カーマの名の下に、愛の狩人が生贄の血を示す真紅の衣装を身に纏い、夜中眠っている良き人、つまり恋人部屋に煙突から忍び込み、愛の矢をお尻に突き刺して愛の虜にする儀式なんでしょ！」
神人（じにん）Aから聞いたクリスマスの情報は、シアナの中でインド電波と妄想的化学反応を起こしたらしい。

ちなみにインドのベンガル地方には、そんな経典も風習も存在しない。
かつて、こんな無残なクリスマスの解釈があっただろうか？　いや、たぶん無い。
ついでに原型も残ってない。

「違う！　日本に関しては完全に違うとはいわんが、お前は大事な部分を完全に誤解しているっ！！」
両手を前に突き出し、必死で首を負って否定するが、こうなったシアナが聞く耳を持つはずも無い。

「しかも、クーリス・マー・スーを一人で過ごすのは、若者にとって最大の屈辱だとか……」
サトウキビの弓を握り締め、ワナワナと震えるシアナ。
そんな部分はシッカリと伝わっているあたり、なんともシアナらしいというべきか。

飛んでくる切花の矢をゴロゴロと回転して避けながら、ミノルが必死の形相でツッコミを入れる。
「ある意味間違っちゃいないけど、お前のそれは何かがぶっ飛んでるからっ！！」
もはや常識や良識は大気圏を突破し、おそらくワープ航法でイスカンダルに向かっている頃だ。

「おだまり、ミノ君っ！　もはやそんな事はどうでもいいから、はやくこの愛欲（カーマ）神の弓に撃たれて、わたしのモノになりなさーいっ！！」
愛欲（カーマ）神とは、インド版のキューピットの事。
サトウキビの弓と五本の花の矢を持つといわれ、その矢に当たったものは……ごらんの通り恋に落ちるといわれている。

先ほどまでシアナが内緒で行っていた作業は、このおそるべき武器を作るためだったのだ。

「なんでこうなるんだーっ！！」

目に涙さえ浮かべて逃げ惑うミノル。

その後ろから、恐るべき速度でミノルの尻めがけて菊の花が飛んでくる。

「よせぇぇっ！　やめろおぉぉぉっ！！　襲われるぅぅぅ！！」

菊の御門に菊が刺さって恋に落ちるなど、しゃれにもならない。

「あはははは、いいわミノ君、その切羽詰った声、最高よ！！　さぁ、もっと楽しませて！！」

もはや手段と目的が入れ替わった上に複雑骨折したかのような笑い声を上げて、真紅の鬼女がミノルを追いかけはじめた。

年末の行事というよりは、もはや世紀末の大惨事と言うべきだろう。

＞ｉ１２９７０―１４０２＜

「ど、どうやら矢が切れたようだな」

街の細い路地に逃げ込んだ黒牛が、粗く息を吐く。

「それにしても、なぜ俺がこんな目に？」

呟きながら後ろを振り返ると、そこにはシアナの放った矢に撃たれて倒れ伏す町の人々。

街の中に逃げたミノルも悪いのだが、シアナの放った矢は、なぜかミノルを大きく外れて別の人に突き刺さる。

その結果がこの大惨事。

ある意味で百発百中の精度を誇るおそるべきノーコンだ。

「なんて有様だ……この俺の街が……」
気絶した子供に鼻面を寄せ、ミノルが一人涙する。

ここはイラクかアフガンか。
死屍累々たる風景（カーマの矢に殺傷能力はありません）に、ミノが深い嘆きを口にしていると、その人々が、ふいにムックリと起き上がる。
まぁ、最初から恋の魔力にあたって気絶していただけなのだし、そのうち起き上がるのは普通なのだが……なぜかミノルは背筋に寒いものをおぼえ、子供の傍から飛び退った。

ずずっ……ずずずっ
「おいっ、おまえらどうした！？」
案の定、心配が具現化したように、街の人々がゾンビのような動きでミノルに向かって歩き始める。
目には光が無く、恍惚とした顔のまま迫り来る様子は、悪夢以外の何物でも無いだろう。
「よせっ、近寄るな！！」
その不気味さに気圧されるように、ミノルが後退った。

「うふふふふ、いまや彼らは私の忠実な愛の僕」
いつのまにか背後に回りこんだシアナが、猟奇的な微笑みを浮かべてミノルを指し示す。
「愛じゃなくて呪いの僕だろ！」
残念なことに、ミノルの全力のツッコミは誰の耳にも届かない。
「さぁ、みんな。　ミノ君を捕まえるのですっ！！」
未だ濡れそぼった髪の毛から真紅のしずくを滴らせ、唇を吊り上げた表情でシアナは命令を下した。

「「ＵＧＡＡＡａａａａａ」」
とても人とは思えない声をあげて押し迫る街の人々。

「あっ、アクションゲームなんて大嫌いだぁぁぁぁっ！！」
某、ゾンビ退治ゲームで有名な街を思い出しながら、ミノルは壁を蹴り、三角跳びの要領で屋根の上へと舞い上がる。

「小癪なっ！！」
叫ぶとともに、シアナは懐から鉈を取り出し、近くの民家を一刀両断。
足場を失ったミノルは地面に叩き落される。

「嘘だぁっ！？」
さらにシアナは、庭先に生えていた菊の花を矢につがえると、驚きの叫び声をあげるミノルめがけて発射する。
そして、矢はあさっての方向へ。

「あぁーーーーっ！？」
ミノルと反対側の方向であがる悲鳴。
どうやら、まだ生き残っていた誰かが犠牲になったようだ。

実はほっといてもシアナの矢は当たらないのだが、パニックになったミノルはそのことに全く気付かず、逃げ惑うことで被害を拡大させていた。
すでに師走の街は、パニックゲームかつホラーゲームの様相を呈し始めている。

「い、いかん。　これ以上街に被害を出しては……」
シアナの僕が増えて逃げ場がなくなってしまう。
戦略的な不利を悟ったミノルは、ふたたび自らの家である神社に

戻ろうと一目散に駆け出した。

その後ろから、シアナの唱える経文が聞こえてくる。

「所福徳　愛染明王　魔訶陀国者　善男子善女人　阿耨多羅三藐三菩提果　一切衆生皆　大歓喜信受……」

「うげぇ！　佛説明王陀羅尼愛染経か！？」

シアナが唱えていたのは、愛欲をもって悟りへと導く仏、愛染明王の経文だ。

自分の技量で弓を当てる事を諦めたシアナは、この仏の力まで借りてミノルを仕留めるつもりらしい。

赤も弓もこの仏の象徴であり、その力を借りるための触媒として十分な効果を持っている。

ヒュゴゴゴゴゴゴゴ

矢としては、けっしてありえない音をたてて飛来する愛欲の矢。

「洒落にならんぞぉぉぉぉ！！」

全身の気を盾のように固め、真紅の呪力を受け止める。

だが、

「ぐおわぁぁぁぁっ！？」

直撃こそ避けたものの、その威力を相殺しきれずに、吹っ飛ばされるミノル。

恋する乙女、恐るべし。

「オン・マーカ・ラーガ・バソロシュニシャ……」

シアナの唱える真言に導かれて、周囲の鉢植えやアレンジメントフラワー、本にはさんだ押し花にいたるまでが宙を舞う。

「こんな、こんなクリスマスはいやだぁぁぁぁぁぁっ！！」

叫びながら全力疾走するミノルの目から、涙がこぼれた。

その後ろから、真紅のオーラに包まれた花々が、マシンガンのように飛んでくる。

「神社に逃げ込む気ね。　絶対に……逃がさないから」

その後ろを追いながら、シアナは舌なめずりをして、甘い吐息を吐くのであった。

＞i12970―1402＜

「こ、ここまでくればひとまず安心か」

息を切らしてミノルが神社の前にたどり着き、ため息をつく。

警戒を緩めたわけではないが、シアナの気配はまだ遠い。

こうもすんなりたどり着けたことに少々不安がぬぐえないが、ちょっと休憩が必要だ。

あれはいくらなんでも精神的にキツい。

「神人（じにん）共め、この始末はキッチリつけてやるから覚悟しやがれ」

生半可な仕返しでは気分が収まらない。

文字通り泣くほど怖かったのだから。

ブチブチと文句を言いながら、ミノルが神社の鳥居を潜る……と……

ズボッ！？

いきなり地面が柔らかくなり、ミノルの足元に大きな穴が開く。

「し、しまった！　罠か！？」

ミノルの先を読んだシアナが、先回りして落とし穴を仕掛けてい

たのだ。
気配が遠いのも、ミノルを油断させるためのフェイク。
早く逃げなくては！
シアナがこちらに駆けつけてしまう。

「うがっ！？」
だが、焦るミノルの足元で、ガチャリという音と共に激痛が走る。

「トラバサミだと！？」
ミノルの足を襲ったのは、特大のトラバサミ。
しかも、ミノルの放つ水気で劣化しないように、水の気を克する土の呪符が貼り付けられている。
魔術が使える人の体ならどうにでもなるが、牛の体では腕力で引きちぎるしか手段が無い。
「く、くそっ、こいつ外れねぇっ！！」
ガチャガチャと必死で金具と格闘するミノルの上に、ふいに小さな影が落ちる。

「シ、シアナ……」
見上げると、そこには巨大な赤い花、ラフレシアを抱えたシアナの姿があった。
おそらく農林試験場から取り寄せた一品だろう。

「みーのー君♪」
この上も無く残酷で無邪気な笑みを浮かべるシアナ。
だが、ミノルを見下ろす目は、まさにカエルを狙う蛇の如し。
「……れっつ、ふぉーりんらーう〜」
シアナは、身の毛もよだつような声で愛を囁きながら、その手にした凶器を振り下ろした。

ミノルの尻へ。

「うぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

＞i12970－1402＜

「つまんなーい！　おもしろくなぁーい！」

目に涙を浮かべながら、シアナはミノルの尻を蹴飛ばした。

「お前は、面白いからというだけの理由で人のケツに花を刺すのか」

その隣に座りながら、ミノルは尻に絆創膏を張って不機嫌そうに呟く。

ミノルの尻にラフレシアが直撃した後、なぜかふたりは神社の中に戻って、縁側で仲良くお茶をすすっている。

その様子からは、まるで『愛の虜』というイメージは無く、いつもどおりの二人の姿だ。

結論から言うと、愛欲の矢はミノルにはまったく効果が無かった。

呪力に感染したはずのミノルにもまるで変化がおきなかったのである。

そして鎖を引きちぎったミノルはすぐに穴から逃げ出して、神社の中に入ると魔術でトラバサミと愛欲の弓を破壊したのだった。

ついでに、シアナが極度のノーコンであるため、花の矢はミノルの取り返しの付かない場所には刺さらなかったといっておこう。

「もーなんでミノ君だけ愛の呪いが効果ないのよ」

苦労の甲斐も無く平然とお茶をするミノルを、シアナが涙目で睨みつける。

当然ながらえらくご不満だ。

罰とばかりに、ミノルの隣の菓子皿を強奪し、秘蔵の醤油焼き煎餅をバリボリと噛み砕く。
「しるか。　そもそもお前程度の力でこの俺に呪いをかけようなど、１００万年早いっ！」
別の菓子皿に、サラダ焼きのアラレをざざーっと流し込みながら、ミノルがふんぞり返る。

ちなみにミノルに愛欲の弓が効かなかった理由だが……
なんのことはない。
最初から相思相愛の人間にそんなものを打ち込んだところで何の意味があろうと言うのか？
ただそれだけの理由である。
なんとなく理由を察してはいるものの、やはり期待していたような効果が出ないのは面白くない。

「いいもん。　次のバレンタインの日にきっちりリベンジするんだから！！」
ミノルのアラレにその魔手を伸ばしながら、シアナがプンプンと頭から湯気を立てる。
「ま、またやるんかいっ！」
どうやら、この騒動には次回が待っているらしい。
シアナに余計な事を吹き込んだ神人達を、拷問にかけると堅く決意しながら、ミノルはげんなりと呟いた。

「……疲れた。　もう寝る」
やがて大立ち回りのせいで疲れたのか、それとも小春日和の日差しにやられたのか、シアナはミノルの膝の上にもたれかかり、拗ねた顔のまま目を閉じる。
「まったく、なんで毎回こんな大騒ぎするんだか」

シアナが寝息を立て始めたことを確認すると、ミノルは懐から毛糸を取り出し、作りかけの作品の仕上げにとりかかった。
途中で目の数を間違えてしまったり、網目の方向を間違えたりしながらも、魔術で手作業のスピードを加速したりして丁寧に仕上げてゆく。

そのままどれほど時間が過ぎただろうか？
作品が完成すると、ミノルはシアナの目蓋にそっと唇を押し当て、
「メリークリスマス。　シアナ」
ハートマークを小さく織り込んだ手編みの白いポンチョをそっとシアナの体の上にかけた。

真っ赤な顔で、聞こえて無いよな？
と小声で呟きながら。

影で隠れたシアナの唇が、そっと笑っていることも知らずに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4948p/

黒毛和牛召喚記：番外編

2011年1月2日18時36分発行